密教儀礼と「念ずる力」

『受法用心集』の「髑髏本尊儀礼」を中心にして

２００６年9月１４日　京都立命館大学
彌永信美

I　『宝鏡鈔』を読み直す

宥快『宝鏡鈔』（１３７５年）に見える「立川流」関係の記述：

2456_,77,0848c21(01):醍醐三寶院權僧正弟子僧正舍弟有仁寛阿闍梨後蓮念云人。依有罪過子細被流伊豆國。
2456_,77,0848c22(02):於彼國爲渡世具妻俗人肉食汚穢人等。
2456_,77,0848c23(00):授眞言爲弟子。爰武藏國立川云所有陰陽師。
2456_,77,0848c24(02):對仁寛習眞言。引入本所學陰陽法。
2456_,77,0848c25(01):邪正混亂。内外交雜。稱立川流。搆眞言一流。
2456_,77,0848c26(07):是邪法濫觴。其具書等名字。
2456_,77,0848c27(00):粗載豐原寺誓願房記二卷書。所要之人可尋見。其宗義者。
2456_,77,0848c28(02):以男女陰陽之道。爲即身成佛之祕術。
2456_,77,0848c29(05):成佛得道之法無此外。作妄計也。
...
2456_,77,0849a10(02):... 彼立川流後流布越中國。
2456_,77,0849a11(06):覺明覺印師資二代參籠高野山。
2456_,77,0849a12(01):其時彼邪流印信書籍多流布。號教相大事口傳多之。
2456_,77,0849a13(03):至于今。
...
2456_,77,0850b24(07):... 弘眞流書籍處處流布。
2456_,77,0850b25(10):多有大和國越中國。一一不能述之。...
2456_,77,0850b27(02):... 立川流者是又處處遍滿。
2456_,77,0850b28(00):本處武藏。次越中大和國多之。書籍不知其數。
2456_,77,0850b29(03):如是邪流。雜入正流之中多之。
2456_,77,0850c01(03):有其憚故。一一不書之。就明師可聞之。
2456_,77,0850c02(02):京都高野邪正雜亂事多之歟。或多不知之。
2456_,77,0850c03(10):皆習傳。或雖粗知之。
...
2456_,77,0850c11(04):又大和國三輪寶篋上人蓮道房書籍等邪見法門多之。一滴鈔等立川法門也。
2456_,77,0850c12(01):此類鈔物口決。通可思僞書。總彼門流中有邪義。

『宝鏡鈔』の典拠：

快成『正流成_邪流_事』（宥快『立河聖教目録』所引）（守山 p. 589）

根本邪流、起_勝覚舍弟左大臣阿闍梨仁寛_（後改蓮念）、伊豆劦被_配流_、起_邪見_。其以来蓮念・兼蓮（念イ）・覚印・澄鑁・覚明如レ是相承。道範・真弁・惠深（ハ）覚明（ニ）相_伝秘密瑜祇（ヲ）_。仍（テ）彼流不清浄方有之歟。

『正流成_邪流_事』：
根本邪流起_勝覚舎弟、左大臣阿闍梨仁寛_（後改蓮念）、伊豆劦被_配流_起_邪見_。

『宝鏡鈔』：
醍醐三寶院權僧正弟子僧正舎弟有仁寛阿闍梨後蓮念云人。依有罪過子細被流伊豆國。於彼國爲渡世具妻俗人肉食汚穢人等。授眞言爲弟子。

『正流成_邪流_事』：
蓮念・兼蓮（念イ）・覚印・澄鑁・覚明如レ是相承

『宝鏡鈔』：
覺明覺印師資二代參籠高野山。其時彼邪流印信書籍多流布。

『正流成_邪流_事』：
道範・真弁・惠深ハ覚明ニ相_伝秘密瑜祇（ヲ）_。

『宝鏡鈔』：
高野山／大和國

『正流成_邪流_事』：
根本邪流

『宝鏡鈔』：
邪法濫觴

『宝鏡鈔』：
豐原寺誓願房記二卷書

『受法用心集』：
越前国豊原誓願房心定為_末代_記レ之。

心定『受法用心集』（守山 p. 531）
二十五歳にして延応元年〔１２３９〕の夏の比、越中国細野の阿聖あさりに秘密瑜祇等流法身三種の灌頂を受け、立川の一流秘書悉く書きつくし了ぬ。

『受法用心集』：
越中国

『宝鏡鈔』：
越中国

『受法用心集』：
立川の一流

『宝鏡鈔』：
武藏國立川云所／立川流

『受法用心集』（守山 p. 530-531）：
問、近来世間に内の三部経となづけて目出たき経ひろまれり。此の経、昔は東寺の長者、天台の座主より外に伝へざりけるを、近比流布して**京**にも田舎にも人ごとにもてあそべり。**此経の文には女犯は真言一宗の肝心、即身成仏の至極なり。若し女犯をへだつる念をなさば成仏みちとをかるべし。**

『宝鏡鈔』：
京都
其宗義者。以男女陰陽之道。爲即身成佛之祕術。成佛得道之法無此外

『受法用心集』（守山 p. 533）：
洛陽五条坊門地蔵堂

『宝鏡鈔』：
京都

『受法用心集』（守山 p. 533）：
陰陽相応〔下記参照〕

『宝鏡鈔』：
武藏國立川云所有**陰陽**師

杲宝『菩提心論聞書』巻第六（「真言宗全書」八 p. 198a-b）
……依レ之大悲大日如来設二両部大法一。転二彼一念迷執一。若此一念ヒカメル心即云二全法界一者。教益依レ何起乎。又且可レ堕二邪見一。当時立川流世流布此義辺起歟。能丶思二案之一亦可レ有二斟酌一。

『受法用心集』の「立川流」と「彼の法」：
心定『受法用心集』（守山 p. 532）
又三十六の年建長二年〔１２５０年〕の夏の比、小僧が奄室に越前国赤坂の新善光寺の弘阿弥陀仏と云ふ僧来る。〔中略〕其の後小僧又事の便り有りて彼の新善光寺に詣し時、弘阿弥陀仏の奄室に召請再三に及びしかば彼の室に望みて見れば経机の上に大なる袋を置けり。弘阿弥陀仏是れを開き巻物を取り出せり。其の数殆ど百余巻なり。小僧是れを開き見れば大旨越中国に流布する処の立川の折紙どもなり。此の中に彼の内三部経菊蘭の口伝七八巻交れり。小僧初めて是れを見るに珍らしく此の巻物を借用して住所に帰てうつしをはりぬ。又此の書のありさま委細ならずして見あきらむる処なかりき。

心定の師・如実の系譜（太字は『宝鏡鈔』で批判された人々）：
今此の上人〔＝如実〕は六人の智者に随つて九流の付法をうけたり。醍醐の三流の中の三宝院金剛王院流光明山の一流、此の三流は**金剛王院の大僧正〔実賢〕**に受け、融源阿闍梨、慶円上人の二流は**宝筐上人**（号三輪上人）に受け、勧修寺の流は顕良伯耆の阿闍梨に受け、壷坂の流をば三輪の禅仁上人に受け、尊念僧都の流をば高野の**道範阿闍梨**に受け、又蓮道上人に遇て小野の大事を面授口決せり。（守山 p. 532-533）

「彼の法」の血脈：
経論の相承：大師－観賢－淳祐－寛空－寛朝－雅慶－済信－深覚－仁海－成尊－信覚－範俊－覚法々親王－寛助－寛信－聖恵法親王－厳信
灌頂の血脈：大師－実慧－益信－法皇－覚性法親王－心海法師（守山 p. 541-542）
「経論の相承」の**観賢**は醍醐寺の聖宝の資（延長三年〔九二五年〕没）。**淳祐**は観賢の資（八九〇～九五三年）。**寛空**は仁和寺別当、観賢の資、また広沢流・寛平法皇〔＝宇多法皇＝空理〕の資（八八四～九七二年）。心定は「寛空は法皇の御弟子なり。仁和寺より醍醐に渡り、観賢僧正に受法し給ふといへども、淳祐に付て受法灌頂の事諸流の血脈に見えず。就中淳祐とは同法ながら不和の中なり」という（p. 542）。**寛朝**は広沢流、寛空の資（九九八年八十三歳〔一説に六十三歳〕没）。**雅慶**は広沢流、寛朝の資（九二六～一〇一二年）。**済信**は寛朝の資、雅慶の入室、広沢流北院流の祖（九五四～一〇三〇年）。心定は「済信は寛朝大僧正の御弟子、雅慶とは御合弟子なり。師弟の事見えず」という（p. 542）。**深覚**も寛朝の資、広沢流（九五五～一〇四三年）。**仁海**は小野流、元杲の資、成尊の師（一〇四六年九十六歳〔一説に九十二歳〕没）。心定は「深覚僧正と仁海僧正と師弟の事、是れ又虚誕なり。深覚は寛朝の御弟子、九条右丞相の御子也。仁海の御弟子覚源宮僧正の時きらに付て深覚の御弟子に成り給ひしに依て、仁海は覚源と中たがひし給ひたりき。中諍ひよからずをはせし事明なり。師弟と云ふ事証拠なし」という（p. 542）。**成尊**は仁海の資、範俊の師（一〇一二～一〇七四年）。**信覚**は広沢流、深覚の資、厳覚の師（一〇一一～一〇八四年）。**範俊**は小野流、成尊の資、勝覚、厳覚の師、「鳥羽僧正」（一〇三八～一一一二年）。**覚法法親王**は白河天皇の第四皇子、広沢流、寛助の資、仁和御流の祖（一〇九一～一一五三年）。**寛助**は広沢流、性信法親王の資、覚法の師（一〇五七～一一二五年）。**寛信**は小野流、厳覚の資、実運の師、小野流勧修寺流の祖（一〇八四～一一五三年）。心定は「成尊僧都と信覚僧正と師弟の事、又信覚と範俊僧正と師弟の事、又寛助大僧正と寛信法務と師弟の事、都て此れ等皆流々の血脈に見えず」という（p. 542）。**聖恵法親王**は広沢流、寛助の資、華蔵院流の祖（一〇九四～一一三七年）。心定は「覚法・聖恵両法親王は共に寛助の御弟子なり。覚法、聖恵御弟子の事も未だ聞えず。就中、寛助は覚法の

御師なるをさかさまに御弟子と記せること如何」という（p. 542）。「**厳信**」について、心定は「聖恵の御弟子に厳信といへるは誰人ぞや。血脈に見えず」と書く（守山 p. 542）。
「灌頂の血脈」の**実慧**は空海の資（七八五～八四七年）。**益信**は広沢流の祖、源仁の資（八二七～九〇六年）。心定は「実慧僧都は承和十四年〔八四七〕に入滅し給へり。益信僧正は仁和二年〔八八六〕に初めて灌頂職位を受く。其の中間年記四十年なり。直の面授更に信じ難きなり。其の上実慧の御付法は唯恵運、真紹の両僧都許なり。其の外の御弟子なし。益信を実慧の御弟子とする事何の記に見えたるぞや」という（p. 541）。**法皇**＝寛平法皇＝宇多天皇（八六七～九三一年。在位八八七～八九七）は益信の資、仁和寺初代門跡。**覚性法親王**は鳥羽天皇の第五皇子、広沢流、兼助の資、守覚の師（一一二九～一一六九年）。「**心海法師**」について、心定は「覚性法親王の御弟子に心海法師と云へるは誰人ぞや。彼の御付法の中に全く心海の名字なし」という（守山 p. 541）。
立川流血脈：大日如来－金剛薩埵－龍猛菩薩－龍智菩薩－金剛智－不空－恵果－弘法大師－真雅－源仁－聖宝－観賢－淳祐－元杲－仁海－成尊－範俊－勝覚－蓮念－見蓮＊
　　|－仁範・・・
＊ －見蓮 －覚印・・・
　　|－阿鑁・・・
（櫛田 p. 351, 360, etc. による）

II　『受法用心集』の髑髏本尊儀礼

問　今此の内三部経に説く所の法には女犯肉食を先と為るよし聞ゆれども正く其の行儀不審なり。如何様の事ぞや。
　答　此の事あらはし申すべし。本寺の正流の人々の事は都て是れをいはず、辺土田舎においては真言師と聞ゆる輩の中に十人が九人は皆是れを密教の肝心と信じあへり。此の中に善人悪人相交れり。天性放逸にして貪利に深き輩、流にさをさす心地して一且の情欲をのみ先として曽て出離の思をわすれたる故に偏に是れを好み行ず。又本性善人にして道念ありぬべき人も密宗の肝心と聞く故に信仰して是れを行ずる人もあり。教導して自らも邪宗を改めて正法に入らしめんが為に小僧先づ上巻に事の由を注して同朋に教へ示す。而るに此の集記不慮に流布して諸人の披覧に及ぶ処に多分人々の云く、此の法は秘中の秘なるが故に露顕せることをかなしみて此の書を作れり。是れ則ち此の法を秘蔵せるなりと云ふ人もあり。又此の法を委細に授かり習はざるが故に其の深義をしらざるに依りて此の破文を作れりと云ふ人もありとかや。是れによつて申につけて放逸し、うたてき心地に侍れども、今此の邪法修行の威儀、並に秘蔵の口伝等大概注しあらはさんと思ふ。其の故には小僧全く是れを秘蔵せざる由深く思ひとれる旨をあらはさんと思ひ侍るによりてなり。先づ此の邪法修行の作法とは彼の法の秘口伝に云く、此の秘法を修行して大悉地を得んと思はば本尊を建立すべし。女人の吉相の事は今注するにあたはず。其の御衣木と云は髑髏なり。此の髑髏を取るに十種の不同あり。一には智者、二には行者、三には国王、四には将軍、五には大臣、六には長者、七には父、八には母、九には千頂、十にほ法界髑なり。此の十種の中に八種は知り易し。千頂とは千人の髑髏の頂上を取り集めてこまかに末してまろめて本尊を作るなり。法界髑とは重陽（五節也）の日、死陀林にいたりて数多の髑髏を集め於（オキ）て、日々に行して幄枳尼の神呪を誦して加持すれば、下におけるが常に上にあがりて見ゆるを取るべし。或は霜の朝に行て見るに霜の置かざるを取るべし。或は其の中に頭のぬいめなき髑髏を取る最上なり。是れ等十種の頭の中に何れにても撰得て本尊を建立すべし。是れを建立するに三種の不同あり。一に大頭、二には小頭、三には月輪形なり。大頭とは本髑髏をはたらかさずしておとがいをつくり、舌をつくり、歯をつけて、骨の上にムキ漆にてこくそをかいて、生身の肉の様によく見にくき所なくしたためつくり定むべし。其の上をよき漆にて能々ぬりて箱の中に納めおきて、かたらいおける好相の女人と交会して其の和合水を此の髑

髏にぬる事百二十度ぬりかさぬべし。毎夜子丑の時には反魂香を焼て其の薫をあつべし。反魂の真言を誦せん事千返に満つべし。是の如くして数日みなをはりなば髑髏の中に種々相応物並に秘密の符を書て納むべし。是れ等の支度よくよく定らば頭の上に銀薄金薄を各三重におすべし。其の上に曼荼羅をかくべし。曼荼羅の上に金銀薄をおすべし。如前、其の上に又曼荼羅をかくべし。如是、押しかさね書き重ぬる事、略分は五重六重、中分は十三重、広分は百二十重なり。曼荼羅を書く事、皆男女冥合の二滴を以てすべし。舌唇には朱をさし、歯には銀薄を押し、眼には絵の具にてわこわことうつくしく彩色すべし。或は玉を以て入れ眼にす。面貌白きものを塗り、べにをつけてみめよき美女の形の如し。或は童子の形の如し。貧相なく、ゑめる顔にして嗔る形なくすべし。如是つくりたつる間に人の通はぬ道場をかまへて種々の美物美酒をととのへおき、細工と行人と女人との外は人を入れず、愁心なくして楽しみ遊びて正月三ケ日の如くいはいて、言をも振舞をもたやすべからず。已に作り立てつれば壇上に据えて山海の珍物魚鳥兎鹿の供具を備へて反魂香を焼き、種々にまつり行ずる事、子丑寅の三時なり。卯の時に臨まば、錦の袋七重の中に裏みこむべし。寵めて後はたやすく開くことなく、其の後は夜、行者のはだにあたため、昼は壇に据えて美物をあつめて養い行ずべし。昼夜に心にかけて余念なかるべし。如レ是いとなむこと七年に至るべし。八年になりぬれば行者に悉地を与ふべし。上品に成就する者は、此の本尊、言を出して物語す。三世の事を告げさとす故に是れを聞きて振舞へば事神通を得たるが如し。中品に成就する者は、夢の中に一切を告ぐ。下品に成就する者は夢うつつの告はなけれども一切の所望、心の如く成就すべし。（守山 p. 555-557）

「三魂七魄」と「陰陽」

問　此の本尊に必ず髑髏を用ふる事何心ぞや。

答　衆生の身中には三魂七魄とて十種の神心あり。衆生死すれば三魂は去て六道に生をうけ、七魄は裟婆に留まつて本骸をまもる鬼神となる。夢に見え、物に托する事、皆此の七魄のなす所なり。人此の髑髏を取りて能く能く養いまつれば其の七魄喜び行者の所望に随つて有漏の福徳を与ふるなり。曼荼羅を書き、秘符を籠めつれば、曼荼羅と秘符との威力に依りて通力自在なり。此の故に種々に建立するなり。

問　和合水を塗る事何の故ぞや。

答　衆生の生益する事は二滴を種として生ずる故に此の二滴を髑髏にぬりて髑髏にこもれる七魄を生ぜしむるなり。喩へば水にあひて諸の種の生ずるが如し。抑々人身の三魂七魄は本より二滴の中に備はり、二滴の母の胎内にしてやうやうかたまりて肉となり、乃至人の体となるに随つて魂魄同じく生長して智恵賢き人とも生ひたてり。然らば今二滴を髑髏にぬれば二滴の三魂と髑髏の七魄とより合て生身の本尊となるべし。魂を「をたましい」　と云ひ、魄を「めたましい」いふ。陰陽相応せざれば生身となり難し。陰陽を相応して生身となさむためなり。此の故に和合水をぬる間に女人を懐妊せさせじとするなり。若し百二十度ぬる間に懐妊せずば其の後は数を定めず、懐妊を期としてぬるべし。則正しく子種の和合水をぬりて三魂を髑髏の七魄に相応せしめんためなり。建立し経つて後は常に行者の肌にそへてあたたかなる気分を入てひやす事なし。鳥の卵をあたためて生長するが如きなり。七年を限りてあたため養ひまつる事は、此の本尊本より幄枳尼の秘術なり。幄天は文殊の化身なり。竜女は応跡幄天と同体なり。彼の竜女は八歳にして正覚を成ぜしかば此の本尊も竜女の本儀によりて八歳より効験をほどこすべし。故に八歳を待つべし。（守山 p. 558-559）

III　「念ずる力」

又俊頼の口伝にしるせる因縁も、此の髑髏の法の悉地と同じかるべし。万葉集の歌に云く、わすれ草わかしたひもにつけたれど鬼のしこくさことにしありけり。此の歌のわすれ草おにのしこ草につ

きて俊頼注して云く、昔人の親の子息二人もちたりけるが、親うせにける後、おやの別れ身にしみて朝夕わすれざりけり。兄弟二人相具して常におやの墓の辺にゆき、泣てはかへりかへりすること月日をかさぬれども、いやまさりければ、兄のおのこ思いける様は、此の思ひさむることなくていつを限り、とすべき事ならず。かくなげき思ひても昔のすがたを二度見べきにあらず、よしなき事なりと思て、萱草といふ草こそ人の思をばわすらかすなんとて、其の草を引てつかの上に植ゑしより後、其の思うすくなりて、弟のさそいけるにもさはりがちにて行かざりければ、弟是れをうらみて思ひけるは、我身も兄の心のやうにやおやのことを忘れやせんずらん心うき事なり。紫苑と云草こそ心に思ふ事をばわすらかずなれとておやのなごりをわすれじがために彼の草引きて墓の上に植ゑたりければ、是れより後いよいよわするる事なくて月日をかさねてもたゆる心なく、常に通ひければ、或時つかの中より音ありて云ける様は、我は汝が親のかばねをまもる鬼神なり。恐るる事なかれ。汝現に孝の心ふかき事、哀におぼゆればこれより後は汝に悦をあたふべし。其の悦と云ふは日中にあらんずる事をすこしもたがへず、夢の中に告げしらすべし。此の告のままに物をはからはば汝帝王まできこしめして国の宝とし給ふべしと云けり。其の後約束の如く告ければ実に三朝の御宝となり、一生のさかえならびなしといへり。此の因縁の如くば志ねんごろなればつかの鬼神悦で徳をほどこす。まして身にそへ、壇にすゑてよくよくまつり養はば霊鬼いかでかもだすべき。是れを真言の秘法と云ふ事、返々もよしなき事なり。真言秘法といはずとも、かかる験もあらば大切なり。俊頼の口伝の如くば真言といはざれども孝の志によりて不思議のしるしありとみえたり。此れは人皆知りたる事なれども、其の因縁相似たる故に引けるなり。是れをもて思ふべきなり。（守山 p. 560-561）

守覚『諸尊法』仁和寺蔵写本の本奥書（阿部 p. 58）：
先師之御口伝等、為後日廃忘、恐々作一巻之書。継門跡輩、此法若有披露者、我成大魔琰、彼仁可治罰。誓願若空、永不聞三宝之名、必々堕悪趣之底（云々）。
　嘉応二年十月七日記之　　沙門守覚（在御判）

付録：大正蔵、日本撰述部の「三界唯一心」偈：
般若心經祕鍵開門訣　濟暹:
2204_,57,0042a24(03):而存唯心所作境義也如舊譯華嚴經云。三界唯一心。
觀經疏傳通記　良忠:
2209_,57,0648c23(02):三界唯一心心外無別法已上事一心中有定散異。定一心者。
大日經疏妙印鈔　宥範:
2213_,58,0137b24(00):故經云三界唯一心心外無別法云云然究竟其本元。
2213_,58,0154c11(02):三界唯一心名爲地云云觀無量壽經云。是心是佛是心作佛。
2215_,58,0733a12(08):三界唯一心心外無別法。
2215_,58,0775a23(00):三界唯一心心外無別法心佛及衆生是三無差別文是明無縁乘中義之第二釋大意也。疏此無縁乘至法無我性者。
大日經疏演奥鈔　杲寶:
2216_,59,0269a06(03):供養自心中王大日尊心數曼荼羅。三界唯一心。心外無別法。
菩提心論見聞:
2294_,70,0052a08(15):三界唯一心心外無別法。
觀心覺夢鈔　良遍:
2312_,71,0085b18(01):問。華嚴經云。三界唯一心。心外無別法。
2312_,71,0085c06(00):故知三界唯一心已。三無差別理自然成立也。

法苑義鏡　善珠:
2317_,71,0232a29(03):三界諸法唯一心造。十地亦言。一切三界唯一心作。
華嚴五教章見聞鈔　靈波:
2342_,73,0133a11(06):十五。問。三界唯一心今經文。
2342_,73,0137a07(05):十五。問。三界唯一心今經文。
華嚴五教章衍祕鈔　普寂:
2345_,73,0636c06(05):又次明十二緣起。於三界唯一心。
法華長講會式　最澄:
2363_,74,0247b02(00):三界唯一心心外無別法
眞言宗教時義　安然:
2396_,75,0410b04(01):故爲色究竟。故華嚴云。三界唯一心也。
胎藏金剛菩提心義畧問答鈔　安然:
2397_,75,0487b06(02):一切世間中莫不從心造。三界唯一心。
2397_,75,0494c24(01):淨心爲塗香萬行爲妙華功德爲焚香果德爲飲食智慧爲燈明供養自心中心王大日尊心數曼荼羅。三界唯一心。
2397_,75,0540c13(05):塵沙無知在第七意云云若華嚴云。三界唯一心。心外無別法。
三密抄料簡　覺超:
2399_,75,0641b02(00):自心中心王大日尊。心數曼荼羅。三界唯一心。心外無別法。
行林抄　靜然:
2409_,76,0339b29(00):心王大日尊心數曼荼羅三界唯一心
溪嵐拾葉集　光宗:
2410_,76,0701b15(02):三界唯一心。心外無別法。心佛及衆生。
2410_,76,0706b21(00):三界唯一心心外無別法
2410_,76,0709c15(00):三界唯一心心外無別法
2410_,76,0719b08(03):燒盡心法具足煩惱斷除也。三界唯一心。
2410_,76,0758c16(04):三界唯一心。心外無別法。以心供合心。
遮那業安立章　仁空:
2416_,77,0205a16(09):故華嚴云三界唯一心也。
行法肝葉鈔　道範:
2502_,78,0884b09(04):供養自心中心王大日尊心數曼荼羅。三界唯一心。
十八道口决　賴瑜:
2529_,79,0068a11(00):心王大日尊心數曼荼羅三界唯一心
鹽山拔隊和尚語録　拔隊得勝:
2558_,80,0591a03(01):三界唯一心心外無別法。得心法雙忘。
絶海和尚語録　俊承　等, 絶海中津:
2561_,80,0737a21(02):隨衆生心應所知量。於是了得三界唯一心心外無別法。
大通禪師語録　侍者, 愚中周及:
2563_,81,0058b09(02):三界唯一心。心外無別法。又曰。孝順至道之法。
正法眼藏　道元:
2582_,82,0178a14(02):釋迦大師道。三界唯一心。心外無別法。
禪戒鈔　萬仞道坦:
2601_,82,0648c07(04):如如ト云フニハアラズ。三界唯一心。心外無別法也。
2601_,82,0651c06(13):三界唯一心心外無別法心佛及衆生是三無差別トハ此戒也。

選擇傳弘决疑鈔　良忠:
2610_,83,0046c20(04):華嚴經云。三界唯一心。心外無別法。
器朴論　託何:
2681_,84,0032b23(01):論三時利益在念佛一乘也。亦是三界唯一心觸類應知。
悉曇略圖抄　了尊:
2709_,84,0707a15(03):心數曼荼羅。三界唯一心。心外無別法。
彌勒講式　貞慶:
2729_,84,0888a20(03):寶山空手之誡聞而未驚。但三界唯一心。心外無別法。

参考文献：

Köck, Stephen (2000), "The Dissemination of the Tachikawa-ryū and the Problem of Orthodox and Heretic Teaching in Shingon Buddhism," 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部・インド哲学仏教学研究室、『インド哲学仏教学研究』7, pp. 69–83.
彌永信美 (2004),「立川流と心定『受法用心集』」、『日本仏教綜合研究』２（２００３年度号〔２００４年刊〕）pp. 13a–31b.
Iyanaga Nobumi (in print) "Secrecy, Sex and Apocrypha: Remarks on Some Paradoxical Phenomena", *in* Mark Teeuwn, Bernhard Scheid, ed., *The Culture of Secrecy in Japanese Religion*（仮題？）
Iyanaga, Nobumi（準備中）, "Le «Jaune d'homme» et le pouvoir magique dans le tantrisme et la culture du Japon médiéval."
『受法用心集』のテクスト: `http://www.bekkoame.ne.jp/~n-iyanag/buddhism/tachika-waryu/juho_yojinshu.html`
甲田宥吽 (1981)「道範阿闍梨の邪義相伝について」『密教学会報』19/20, pp. 66–70.
櫛田良洪 (1964)『真言密教成立過程の研究』山喜房仏書林
守山聖真 (1965)『立川邪教とその社会的背景の研究』鹿野苑
James Sanford, "The Abominable Tachikawa Skull Ritual", *Monumenta Nipponica*, 1991-1, p. 1-20
Broucke, Pol vanden (1992), *Hokyosho : "The compendium of the precious mirror" of the monk Yukai,* Gent, Belgium : Rijksuniversiteit Gent, Vakgroep Oost-Azië, Dienst Japanse Taal en Cultuur
橋本不美男・有吉保・藤平春男校注・訳 (1975)『歌論集』（「日本古典文学全集」50）小学館
小峯和明 (2006) 『院政期文学論』笠間書院 p. 448-456.
小峯和明 (2001) 『説話の森――中世の天狗からイソップまで』、岩波現代文庫
阿部泰郎 (1992) 「『とはずがたり』の王権と仏法――有明の月と崇徳院」（赤坂憲雄編『王権の基層へ』、叢書「史層を掘る」三）新曜社